

SAPPORO 教区 NEWS

第26号

2018年1月1日

発行：カトリック札幌教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10

Tel. 011-241-2785 / ホームページ：http://www.csd.or.jp

主のご降誕と新年のお喜びを申し上げます

「札幌教区宣教司牧評議会」開催

10月28日(土)11時30分より札幌マリア院に全道6地区から信徒・修道者・司祭の評議員が集まり開催
午前中は、司教報告、各地区の現状報告と行われました。

司教報告では、宗教法人のことでないが、大きな動きとして、旭川藤女子高等学校と北見藤女子高等学校の設置者を学校法人藤学園から学校法人北海道カトリック学園へ移管するための協議を開始したことを報告。ミッシヨンスクールの灯を消さないこと、特に北見地区では唯一の私立高校でもあることから、教会にとっても社会にとっても学

◆東京大司教にタルチシオ菊地功新潟司教

菊地司教は10月25日午後8時(ローマ時間正午)に東京大司教に任命され、12月16日に着座式を行う。菊地大司教は新潟教区管理者を兼任。

◆那覇司教にウェイン・バート神父

ウェイン・バート神父(カプチン・フランシスコ修道会・与那原教会主任司祭)は、12月9日午後8時(ローマ時間正午)那覇司教に任命。司教叙階式は2月12日に行われる。



校を維持することは重要なことであると述べられた。午後からは、司教からの諮問案である宣教を活性化させるためにどうすれば良いのかということについて審議がなされた。札幌地区を除く5地区では司祭が少なく、すでに集会祭儀が定期的に行われており、集会祭儀司会者の養成が取り上げられ話し合われました。各地区ではしっかりとした養成体制が整えられており、司牧者の減少に備える体制は既に整っているとの報告がありました。札幌地区でも将来的に集会祭儀の必要性は当然のごとくありますが、現状では多くの小教区で司祭が常駐しているため、集会祭儀をしなくてもよい状況となっ

ています。しかし、数年前札幌地区でも集会祭儀の必要があったこともあり、集会祭儀の司会者の経験者は多くいますので、対応は可能であろうとのことでした。司祭減少を見据えた取り組みが必要との意見で集約された感があります。

司祭評議会を中心に現在検討されていることですが、フランシスコ会との協定が交わされて、地区ごとの移管体制がなくなると、修道司祭と教区司祭が地区を越えて協力していくことができるようになり、宣教の活性化について考えやすくなるのではないかとこの意見がだされました。

また、宣教の活性化の中で、洗礼者を増やしていく取り組みとして、新司教館(通称・札幌教区カトリックセンター)を活用して合同入門コースを立ち上げることができないかという意見も出されました。

次に小教区特別積立金(建築資金、修繕費等)を相互に助け合うために使用するということについて検討されました。共通して出された意見としては、拠出しても小教区で積み立てた金額が

保証されることでした。それを前提に大筋で司教の提案に応じられるとの意見でした。管理・運用の仕組みを整え、その仕組みを作るプロジェクトチームを結成し、そこで作られた具体的な内容をたたき台として話していくほうがよいという

「札幌教区司祭評議会」開催

10月27日(金)13時30分よりカトリック北26条教会において開催し、全道各地区の司祭評議員が集まり、全道司祭大会の開催内容、札幌教区の将来を見据えた宣教について話し合われました。

全道司祭大会の在り方を再検討し、大会前後が移動日となるため、会議や講演会などは実質1日で終わってしまい、十分に話し合いや分かち合いを行うことができませんでした。来年から3泊4日に伸ばし、これからの宣教についてじっくり勉強会や分かち合いを行うことに決まりました。

来年の司祭大会では、信徒の諸活動団体や委員会の話聞き分かち合うことや、外国人司牧に詳しい方を呼んでその体験や経験をもとに分かち合うことなどを行ってはどうかの意見が出

意見が出されました。

※ 宣教司牧評議会とは、教区司教の諮問機関という位置づけです。教区の幅広い層の方々の意見を教区司教の方針に反映させることを目的としています。

され話し合われました。次の運営委員会で具体的にどのようなテーマでだれを呼んで話を聞くかを詰めていき、2018年1月19日の司祭評議会にて提案し、承認してもらうことになりました。

次に、20年後を見据えた札幌教区の宣教について話し合われました。将来、司祭の減少が見込まれていますが、そのためにどのように司祭を配置すればいいのかを検討されました。フランシスコ会も司祭の減少・高齢化が進み札幌教区へ派遣できる司祭が少なすぎます。フランシスコ会に委託されている3地区(旭川、釧路、北見)への司祭派遣を全道的に考え司祭人事を検討していかなければなりません。フランシスコ会司祭に札幌司教から直接小教区委託をするためのシステ



= 全体像が見えてきました =

新司教館建設の経過報告

新司教館の外観もその姿を現しました。12月末現在の進捗度は90%が完成して

いるとのこと、工事は予定通りに進んでいます。委員会や黙想会で利用できる部屋も間仕切りが終わりその概要がわかるようになりました。また、地下には納骨堂が設けられ、工事完成後に保健所に最終（納骨堂経営許可）申請し、経営許可を頂いたのちに、皆さんに3月頃には募集のご案内を差し上げられると思います。も



= 2階ロビー吹き抜け周り =

ム作りが必要となります。現在、フランススコ会の司祭は管区長の指名により、3地区の小教区に派遣され、司教が任命するということになっていきます。これを管区長と司教が協議の上で、小教区に派遣する司祭を最終的に司教が決定することができないかを検討しています。もちろん、地区の垣根が解消されたとき、教区司祭も全道の全てでできそうですので、教区司祭も心構えが必要となります。これらのことを変えていくにあたり、信徒の方々にも将来の宣教司牧について、協力を求めることにな

るでしょう。次に問題となるのは給与についてで、これについてはフランススコ会と教区の給与のシステムを双方理解し、すり合わせていく必要があります。財源としては教区分担金、地区分担金、ミサ謝礼金となりますが、その合意形成も進めなければなりません。まず、第一にしなければならぬことは、現状を把握することと将来の司祭減少の見込みをしつかりと見積もることにあります。そのためプロジェクトチームを立ち上げていかなければならないでしょう。

※ 札幌教区司祭評議会とは、教区長である司教の諮問機関として司祭団の代表が招集され、信者の司牧的な益となることを推進し提案するために設けられています。4月の改選によりメンバーが入れ替わり、間野正孝神父が運営委員長として選任されました。これまでしばらくの間、運営委員会が招集されていままんでしたが、運営委員長である間野神父が評議員の中から3人の運営委員を選任し、評議会の準備運営にあたることとなりました。

カトリック札幌司教区ハラスメント対応デスクが電話相談を開始

～聖職者によるハラスメント被害ホットライン～ 12月5日より

【ホットライン（電話相談）開設】

12月5日、「ハラスメント対応デスク」の窓口ともなる相談電話を開設しました。詳しくは、既に配布されておりますポスター、パンフレット、携帯カード（図）をご覧ください。電話番号は、080-2879-13168、受付時間は、火曜日から金曜日の午後12時から午後4時まで。折り返しの電話はできませんので、繋がらない場合は、時間を置いて再度ご連絡下さい。

ホットラインでは、相談内容や意向を確認しながら、お話を伺います。もちろん、ご相談者の秘密は固く守られます。特に性虐待被害を受けた方が、声を出すということには大きな勇気が必要になります。ホットラインは、そのような方々にも対応できるように準備しています。けっしてあなたが悪いものではありません。

【啓発活動】 「ハラスメント対応デスク」では司祭への啓発活動に続き、信徒等への啓発活動として各地域に担当者が出向き、「性虐待被害者のための祈りと償いの日（四旬節・第二金曜日）」の周知と「ハラスメント対応デスク」の活動内容について説明を行う啓発訪問について、地区の大会等での設定をお願いしたところ、4地区から要請があり、修道会を含め全10ヶ所を訪問、参加者は約450名にもなり、多くの信徒の方々が関心を寄せてくださいます。

う少しお待ちください。新司教館建設にかかわる寄付金は、1550件106、866、650円（12月12日現在）です。皆様のご協力に感謝します。

- 7月・旭川五条教会（五条・六条・大町・神居合同ミサ）
- 9月・札幌地区使徒職大会、北見地区カトリック大会、中標津教会、釧路教会
- 10月・柏林台教会（帯広・柏林台合同ミサ）、池田教会（池田・本別合同ミサ）、マリアの宣教師フランススコ修道会、殉教者聖ゲオルギオのフランススコ修道会
- 11月・聖ベネディクト修道院

カトリック札幌司教区
 聖職者によるハラスメント被害ホットライン
080-2879-3168
 火曜～金曜 12:00-16:00 祝日・夏季冬季休業日除く

相談者の秘密は厳守します。
 女性・男性・子ども、だれでも相談できます。
 一人で悩まず、勇気をだしてお電話ください。

旭川五条教会では、4教会の皆さんが集まる貴重な機会に忙しい中、多くの方に参加いただきました。初めて信徒向けに説明を行い、皆さんの反響からこの取り組みがやはり重たい話であることを改めて感じました。また、口頭での説明だけではなく、手持ち資料があった方がよいと思われたことから、次に行われた札幌地区ではデスク開設周知の意味も含めて、使徒職大会参加者全員に説明資料を配布しました。各小教区単位でも知っていたいただきたい内容でもあるため、運営委員長等に参加を呼びかけたところ、大会後の説明には予想以上の方々が参加くださいました。

北見地区はカトリック大会のテーマを「ハラスメントに気がつくことから」と題し、地区全体で取り組んでくださいました。大会前に「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」発行の「セクシャル・ハラスメントに気づくことから」や、現代のハラスメント事情の手作り資料等が配布されており、啓発説明後のグループディスカッションでは活発な分かち合いが行われ、

デスク担当者は皆さんから貴重なご意見を伺う場となりました。

釧路地区は主要教会への訪問要請があり4か所を訪問。中標津教会では、土曜日の午後には教会まで足を運んでいただき、少ない人数ではありましたが、説明後に参加された皆さんから直接いろいろなご意見を伺うことができました。釧路教会では、主日のミサ後に説明しましたが、司祭や信徒会長より参加の呼びかけをしていただいこともあり、多くの方が参加し、いろいろな感想が寄せられました。既にカトリック新聞等で「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を知り、



= 説明会の様子 =

心に留めていた方もいました。柏林台教会(帯広・柏林台合同)では守秘義務の重要性や匿名での相談など具体的な質問が積極的であり、関心の高さを感じました。池田教会(池田・本別合同)では、お話の後、自由に意見交換する時間を持つことができ、少ない人数ではありましたが、有意義な時間となりました。

当初、聖職者による信徒へのセクシャル・ハラスメント被害に対して、どのような取組ができるのかを模索しながら活動を開始しましたが、今回の啓発活動を通して、ハラスメントが多様化していることや信徒間或いは信徒から聖職者へという方向性もあることに信徒自らが気づき、この問題が他人事ではなく、自分の問題である意識化されたと感じます。これまでの啓発活動を通して、皆さんからいただいたご意見・ご感想は、今後の活動に活かしていきたいと思っています。まだ啓発活動に出向いていない地区や小教区でも要請がありましたら、担当者が伺い、説明したいと思っておりますので、どうぞご連絡下さい。

「新福音化の集い」に参加して

10月20日(金)〜22日(日)

に、東京潮見の日本カトリック会館で開催された「新福音化の集い」(新福音化委員会主催)に派遣されました北一条教会・柳澤辰也さんと、北十一条教会・荻野裕子さんから概要の報告と感想をお聞きしました。

新福音化の集いは、新福音化委員会関係者8名(Bp. 諏訪、Abp. 高見、Abp. 岡田、Fr. 宮下、Fr. 松浦、Sr. 大岩、松隈氏、土佐谷氏)、全国15教区(沖縄教区欠席)から信徒29名の計36名(Abp. 高見は教区司祭帰天のため欠席)の参加により、新福音化委員長・諏訪司教(高松教区)から以下の開催趣旨説明を受けて始められました。

「福音と社会をどの様に結び付けて良いかわからない」といったネガティブな回答が多かった。アンケート結果を受け新福音化委員会は以下の二つの課題を得た、

・「NICE以降はどうだったのか、何をしていたのか」を分かち合う

・「福音と社会をどう結びつけたら良いか?」への励ましのメッセージを発信する

取組に際して、メッセージ発信は委員会だけで進めるのではなく、各教区で福音に生きていく信徒の声を聴き、共に学び、その上で励ましのメッセージ及び何らかの提案を発信したい。その為に集まって頂いた。」

この集いの叩き台の一つとなるNICEの活動を「参加信徒の大半が知らなかった」という事や、参加信徒は、置かれた場所での全国的な社会福祉活動のリーダーとなつて福音を实践されている人から、(私の様に)福音を表層的にしか生きていない人まで多岐にわたるスピリチュアリティ

もメンタリテイも様々な信徒の集団が果たして期待に込められるのか、この不安がありました。新福音化委員の皆様からサポートを頂き、グループینگされた参加信徒間の分かち合いとKJ法をベースにしたエクササイズ(福音マーケット)、そして最終日の「新福音化に向けて大切にしたいキーワード」の作成に向けて集いは進められました。

誌面の都合でプログラムの内容と作成されたキーワードは掲載できませんが、最終日に派遣ミサに与り全てのプログラムが終了した時、小聖堂には感極まり滂沱の涙を流す人、立ち上がれない人、そして抱擁して再会の約束をされる人たちの姿があったことを申し添えます。尚、全体プログラムは札幌教区にも縁が深い六甲学院の吉村先生が構成されたものでした。

新福音化委員会による励ましメッセージ発信に寄与出来たのか、期待に込められたのかは判りませんが、「新福音化の集い」に参加して感じ得た情動は、正に勝谷司教が常に触れられる「次の100年のための取組」への対処と同根かも知



れない、第2バチカン・NICEでの大きな変化の一つは「一つの教会」の意味を「画一性 (uniformity)」から「多様性における一致 (unity)」に置くようになったことにあり、この両者の違いと一致の意味を腑に落とすことが肝要ではないか、と言うものでした。自身の霊性を高めるだけでなく、勝谷司教から信徒一人ひとりが提示を受けている「札幌教区の課題」についても考える機会を与えて頂いたことに感謝した3日間でした。

全国から集まった29人が共に分かち合い喜びの内に一つとなる初めての体験に感動致しました。最初は参加を躊躇した私でしたがが神様の呼びかけに今は感謝の思いでいっぱいです。

(Y.O.)



◇地区報告◇

「2017旭川地区カトリック大会開催される」

8月20日(日)旭川市大雪クリスタルホールにて旭川地区カトリック大会を開催。「それでも人は生かされている」～悲しみを乗り越えて勇気が生まれる時～」というテーマで、煉獄援助修道会のシスター・ラファエラ高木慶子(よしこ)さんが講演を行いました。司教、司祭、助祭が12名、信徒は約360名が参加しました。午後からは勝谷司教司式によるミサが執り行われ、その中で9名が堅信の秘跡を受けました。

札幌地区使徒職大会が藤女子大学で800名の参加により開催されました。はじめに札幌地区長加藤鐵男神父の開会挨拶と、昨年の降誕祭から今年の復活祭までに受洗された82名が紹介され、司教様からお祝いの言葉をいただきました。次に、今回のテーマである「福者ユスト高山右近の霊性に学ぶ」について、イエズス会日本管区長デ・ルカ・レンゾ神父による講演がありました。レンゾ神父は、史料と史実から高山右近の霊性を説き明かし、現代を生きる私たちにも通じるキリスト教徒

「2017旭川地区黙想会」

9月23日(土)午後から24日(日)午後まで、旭川五条教会にて『聖霊は今日も働いておられる』をテーマとしてフランシスコ会といったま修道院長である松井繁美神父の指導のもと旭川地区黙想会が開催された。120名が参加しました。

「2017札幌地区使徒職大会の報告」

としての在りかたを示してくださいました。

講演の後、勝谷司教司式のミサが行われ、今回は英語ミサグループに合わせて平和の賛歌と拝領の歌を英語で唄いました。午後からは会場をクサベラホールに移し、札幌地区の活動報告として、青少年の活動報告と札幌司教区ハラスメント対応デスクの報告がありました。午後の部は自由参加でしたが、200名を超える参加者でした。



青少年の活動報告は「フイリピンボランティア2017」の報告です。高校生が現地の小学生から高生までの子どもたちと授業を通して交流し、子どもたちの家でホームステイをしながら生活を体験し、日本とフィリピンの歴史と現在を学ぶ研修旅行です。訪問した学校は、比較的裕福な家庭の子どもたちが通う



する行動の全てとなります。

第16回 カトリック苫小牧地区信徒大会

10月15日(日)に、苫小牧教会を会場にして「第16回カトリック苫小牧地区信徒大会」が開催されました。この信徒大会は苫小牧プロック各教会と室蘭プロック各教会が交互に当番教会となつて隔年で開催されているものです。

当日は苫小牧地区6教会(伊達・室蘭・東室蘭・登別・静内・苫小牧)からおよそ110名の信徒が一堂に会しました。

今年のテーマは「信仰者の家庭支援」ということで、札幌カリタス支援センター長の菊田秀治氏と2名のスタッフを講師としてお迎え

「ラ・サール グリーンヒルズ」と、もっとも貧しい家庭の子どもたちが通う「ハイメ・ヒラリオ学園」です。この二つの学校を中心として、参加した高校生たちは貧困と富について考え、貧しい生活をしている方々と触れ合つて、本当の幸せとは何かについて考えました。また、第2次世界大戦博物館で戦争の歴史や日本軍が現地で行ったことを学び、戦争と平和についても考えました。

札幌司教区ハラスメント対応デスクからは、設置の経緯と具体的な活動内容の説明がありました。対応デスクが取り扱う範囲は、セクハラ、パワハラほか教会内にある嫌がらせや不快に



しました。

「キリストの愛の精神に基づいて、支え合い、学び合い、共にいまを生きる」というカリタスの理念に基づき、スクリーンを使って具体的なお話を伺うことができました。そのお話の中から、私たちは他の人を助けるために神につくられたということをお忘れずに、共に苦しみ、共に歩むという思いの大切さを再認識することができました。

特に「アンパン」と題する小さなお話を通して、介助される側も介助する側も相手の心を汲み取ることの難しさとその中で味わう深い喜びなど、一人一人が実習生になった気持であれこれ思い巡らし、自分ならどうするかという考えを述べ合ったことも忘れられない時間になりました。

信徒大会は、今回初めて教会を会場として開催しました。従来のように市民会館やホテルを使用した場合と違い、昼食の際など多少狭いという不自由はありましたが、一つ屋根の下に集うという仲間意識を味わうこともできたように思います。また教会を会場にしたことにより経費が少なく

済みました。おかげで借金が残金と当日のミサ献金とを合わせた支援金をカリタス家庭センターにお送りすることができたことは嬉しいことでした。

14時から、ライヤ神父様、小林神父様、韓神父様によるミサがあり、各教会から心に響く共同祈願が捧げられました。この2年に一度開かれる「カトリック苦小牧地区信徒大会」と、各教会が順番に当番になって毎年開かれている「カトリック苦小牧地区女性大会」が、苦小牧地区の信徒が顔を合わせる大切な機会となっています。今回の信徒大会は2019年に室蘭ブロックが当番となって開催される予定です。

苦小牧地区室蘭ブロックの全体の動き

「室蘭ブロック合同夏期学校」

7月15日～17日に開催。4教会合同夏期学校は14回目を迎えました。今年度の参加者は14名と少なかったこともあり、室蘭教会と東室蘭教会で行いました。少し狭かったということはある

りましたが、聖堂での祈り、神様の話など、また、東室蘭教会敷地内の芝生で、ジーンズスカンをほお張れたことができたことは、参加した小中学生にも新鮮だったようです。

経済的なことも含め、参加の小中学生が楽しく元気に有意義に2泊3日を過ごせるようリーダーも頑張っております。しかしながら、リーダーの高齢化と少子化も徐々に進み、今後どのように準備していけばよいかなど、研究を重ねています。

「室蘭ブロック集会祭 儀研修会」

7月23日(日)懸案でした集会祭儀の研修会が、小林神父様を講師に、東室蘭教会で行われました。4

教会から30名以上の信徒が参加し、現在の日本における集会祭儀の位置づけを学びました。これまで行われていた集会祭儀とかなり異なる部分もあり、各教会共通の進行の手引きのようなものが欲しいとの声が多く、ブロックとして検討を進めることとしました。

「イースターヴィレッジ・コンサート」

11月5日(日)海星学院ベネディクトホールをお借りし、イースターヴィレッジの方々によるコンサートを行いました。当日は、ベルナルド勝谷太治司教様もおいで下さり、ミサは4教会合同ミサとして行われ、ミサ後に祐川神父様の進行によりコンサート、その後軽食を採り乍ら交流を進めました。

イースターヴィレッジは、札幌教区が力を入れてある施設ですので、関わりが深い信徒も多いようでした。参加者全員認識を新たにした交流会でした。またの再開を願いながら終了しました。

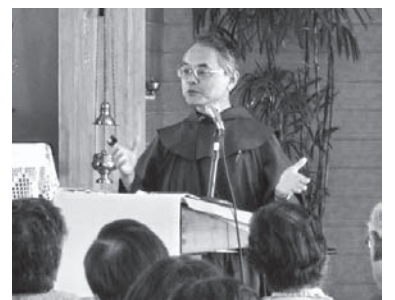


釧路地区カトリック大会 ーわたしたちの福音宣教ー

釧路地区宣司評の独自の活動は、カトリック大会、地区評議会、運営委員会(2回)です。今回は、8月27日(日)に釧路教会で開催されたカトリック大会について紹介します。午前は、フランシスコ会日本管区長・村上芳隆神父の主司式でミサ、午後は村上神父の講話「わたしたちの福音宣教」でした。講話の背景には、釧路地区の信徒の状況と、フランシスコ会側の状況とを考えると、将来に備えて対応策を考えなければならぬという事情があります。

□M・V・V Mはミッション(使命)、Vはバリュー(行動規範)、次のVはビジョン(将来構想)。「単にコーヒーを売るのではなく、人々の心を豊かで活力あるものにする」ことをミッションとする某

コーヒーチェーンのある店舗での出来事。近くで交通事故があった時、事故を起こして呆然としている女性に、店員が声を掛け、コーヒーを手渡したとのこと。



このエピソードは、ミッションがしっかり身につけば、そこから応用範囲の広いバリューが生まれる、ということを示唆している。

□フランシスコ会日本管区 の宣教方針

ミッションは「自分たちのために生きるのではなく、他者のために益をもたらし」者となること、バリューは「共同宣教司牧体制の確立」(小教区同士の交流と将来の構想、そのための集会祭儀の確立、信徒によるキリスト教入門講座担当者の養成)。

□「問題」と「課題」

ある状況を、「問題」(プロブレム)と捉えると望まないことを取り除こうとするが、「課題」(チャレンジ)と捉えると「本当」に大切にしていることを存在さ

せよう」とする。「共同宣教司牧体制の確立」に取り組むに際しては、釧路地区やフランシスコ会の状況を問題ではなく、「課題」と捉えて対応することにより、主体的な関わり合い、発想転換や行動修正が可能となり、ミッションの達成に結びつくのではないかと。

□地区への問い掛け

・わたし（たち）が最も大切にしたいこと（存在させようとしていること）は何？

・わたし（たち）出来そうな小さな一歩は何？
・その大切なことが実現し始めると、どんな変化が見える？

終わりに、MVVに関するお話しから、地区のあり方を考える際、しっかりと基本的な考え方（特に、ミッション）を持つことが非常に大切だと強く感じました。意見を出し合い共有する「ワールド・カフェ」が紹介されましたが、体験できず残念でした。お忙しい中、有意義な刺激を釧路に届けて下さいました村上神父様に感謝を述べています。

◇青少年の活動◇

「2017年度のスポーツ大会行われる」

2017年10月22日(日)に藤学園の体育館を借りて青年会主催のスポーツ大会が行われた。スポーツ大会とは、高校を卒業して青年となった人だけではなく高校生も対象として行うイベントである。主に高校生と青年の交流と、青年同士の交流を目的としている。今回、初めて青年会に顔を出す青年もいた。バレーやバドミントンという競技を通して、他の青年達ともすぐに打ち解けられた様子であった。



現在の青年は、仕事や学校があり教会に足を運ばないという人が多いように思われる。そのせいもあって、教会へ行っても同年代の人が少なく、教会にあまり魅力を見いだせない人もいます。そういった青年達に教会のこともっと身近に感じてもらいたいと思い、青年会では交流の場を積極的に作ろうと取り組んでいる。

信仰を持っていて同年代の青年との交流の場を提供することは、青年会が進んですることだと考えている。これからも多くの青年に参加してもらい、交流を深める中で教会やイエス様に興味を持ってもらえるような企画を立てていきたいと思っています。

全道青年会 EMAIL: zendousainen@gmail.com

「2017フィリピンボランティア」

2017年7月25日から8月4日まで、フィリピン・マニラ近郊のバガック市にあるラ・サール会が経営する学校「ハイメ・ヒラボランティア」が開催され

ました。参加者は高校生が11名、引率の先生が2名、ラ・サール会のブラザー1名、司祭1名でした。この学園には小学生から高校生までの現地の子どもたちが在籍しています。彼らの前で授業を行いながら交流をし、また子どもたちの家でホームステイをしながら生活を体験し、日本とフィリピンの歴史も味わうという研修旅行です。

ハイメ・ヒラリオの生徒の保護者はほとんど収入のない漁師と農業従事者です。



す。そのためにこの学校に通っている8割の生徒は無償教育を受けています。参加した高校生たちは貧困について考える機会が与えられました。また、貧しい生活をしている方々と触れ合っ、本当の幸せとは何かを考えさせられたようです。そして、第2次世界大戦博物館での戦争の歴史を見て、そして実際に「バターン死の行進」の道を歩いて、戦争と平和について考える機会となりました。

参加した高校生の心に深く刻まれたのではないのでしょうか。

帰国後も、報告書を作成し、札幌地区使徒職大会や湯川教会で帰国報告会を行っていました。

※「バターン死の行進」とは、第二次大戦中の日本軍によるフィリピン進攻作戦において、バターン半島で日本軍に投降したアメリカ軍・フィリピン軍の捕虜が、捕虜収容所に移動する際に多数死亡した行進のことを言う。全長は120kmで、その半分は鉄道とトラックで運ばれ、残り42kmを3日間徒歩で移動した。

◇周年行事◇

大麻教会献堂50周年記念式典行われる

2017年10月1日に献堂50年を迎えたカトリック大麻教会で、10月7日土曜日10時から記念ミサと記念式典が執り行われた。司教1人、司祭6人、信徒90人が集い、50年の宣教の歴史をお祝いした。

勝谷司教は記念式典の中での講話

「大麻の共同体にとって、活気に満ちた創立期の記憶は今を支える力となるでしょう。今教会で見るのは、あのとき集まった青年たちではなく、その親たちの世代の年相応に変化した顔が多いのですが、それは同様に多くの困難をも克服してきた人たちの経験と知恵に溢れた顔です。与えられた現実には必ず神のご意志が働いています。立ち向かうべき現実がいかに厳しく見えようと、過去に勇気づけられ、その延長にある未来を見つめる時、今の現実こそ神の招きがあることを発見できるはずで

す。共に大麻教会と札幌教区の未来を形作っていきま

しよう。」
カトリック大麻教会運営委員長の佐藤聡智さんのお話

「道営団地として造成

真つただ中、1967年10月1日の日曜日に誕生した大麻教会は、多くの子供たちが集うにぎやかな教会でした。隣りの公園の木々も、大人の背丈ほどの、植えたばかりの貧弱なものでした。現在は、教会の屋根のはるか上まで枝を伸ばす、威厳を備えた大木に育っています。ミサに集う面々とともに、50年の歳月を感じさせるものです。50周年を祝い、次なる50年に思いを馳せるとき、若い世代の人たち、近隣に住む外国籍の方々、そして、私たちのすべて

天使学園 創立70周年記念式典開かれる

2017年12月8日(金)

午後2時から、ホテル札幌ガーデンパレスで「学校法人天使学園 創立70周年記念式典、記念祝賀会及び記念講演会」が開催されました。

記念講演会では、上智大学グリーンフケア研究所特任所長であるシスター高木慶子氏が「美しい人間像を求めて」というテーマで講演されました。記念式典では、勝谷司教司式のもと祈りの集いが行われ、創立70周年を感謝するとともに今後の発展をお祈りしました。



札幌マリア院で修道誓願50・60周年記念感謝ミサ

2017年11月23日

(木・祝)13時30分から、殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会の札幌マリア院聖堂で、修道誓願50年と60年の修道女8名が、司教2名と司祭10名、修道者数十名、そして150名あま



りの信徒が見守る中、それぞれ誓願の更新を勝谷司教司式のミサの中で宣言した。ミサ後、藤女子大学のクサベラホールで金祝とダイヤモンド祝の祝賀会が催され、節目の年を迎えた8人の修道女をお祝いした。

ダイヤモンド祝(誓願60年)

マリア・ロザリア

鈴木智子

(すずきさとこ)

マリア・スタニスラ

森岡千恵子

(もりおかちえこ)

マリア・ヒアツィンタ

三浦房江

(みうらふさえ)

マリア・クニゲンデ

井上良子

(いのうえりょうこ)

金祝(誓願50年)

マリア・ロザンナ

渡邊清子

(わたなべきよこ)

マリア・マルグリット

永田淑子

(ながたよしこ)

マリア・マグダレナ

木立典子

(きだちのりこ)

マリア・ルチア

井上高子

(いのうえたかこ)

カトリック系女子高校等の北海道カトリック学園への移管協議始まる

学校法人「藤学園」(札幌市、理事長・永田叔子)は、藤学園が設置する「旭川女子高等学校」(旭川市、校長・水野清哉)及び「北見藤女子高等学校」(北見市、校長・大坪昌

広)並びに「旭川藤幼稚園」(旭川市、園長・好井千乃)について、2019

年4月、学校法人「北海道カトリック学園」(札幌市、理事長・勝谷太治)へ経営移管することを前提に、両法人間で「高等学校等の設

置者変更に係る基本合意に関する協定書」を締結し、2017年10月5日に協議を開始した。

両法人は、カトリック精神に基づく教育方針での運営という点では変わらないが、修道会が運営する法人から教区が運営する法人へ移管することで、より小教

区や教区司祭とのつながりが深まることが期待される。それによって地域社会の中で連携してカトリックの宣教をしていくことがで

きるのではないかと考えられている。

上記二つの高等学校は、開学以来、女子教育を伝統として地位社会の各分野を担う優れた人材の養成に努めてきたが、この移管協議

を機に、新たな「男女共学の高等学校」として生まれ変わろうとしている。協議が開始されたばかりだが、この新しい取り組みによって新しい宣教の実が結ぶことを願う。

「札幌教区6地区正義と平和担当者会議」開催

11月4日(土)カトリック

北一条教会カテドラル・ホールで「第3回カトリック札幌教区6地区正義と平和担当者会議」が開かれ、信徒、修道者、司祭、司教あわせて57名の参加。

平和で一人ひとりの人権が大切にされる『福音の実現』に取り組む札幌教区の皆様がそれぞれの経験を持ち寄り、報告、情報や意見交換、今後のよりよい連携体制と活動のあり方などについて、4時間半に及ぶ熱い会議となりました。

オープニングでは、貧困や紛争で家族と暮らせない子ども達が希望を取り戻す場である「イースタービレッジ」の皆さんに参加いただき、神への賛美と平和を願う歌声を聞かせていただきました。

勝谷司教は、基調講話で「明治以降の教会の歴史を振り返り、今後の在り方について考える」をテーマに話され、結びに戦前の教会を批判するのではなく、その歩みを知り、学び、これから私たちがとるべき態度を真剣に考え準備しなければならぬと注意喚起されました。

訃報

■マリアの宣教師フランシスコ修道会

▽Sr.Mスヨフスカ力原田キヌ
肺がんのため9月12日午前5時17分天の御父のみもとに召されました。長年小児病棟部長、病院の案内など医療分野の使徒職に携わりました。享年89歳

【略歴】

1928年3月20日
北広島市島松生まれ
1950年12月15日 入会
1955年12月15日 終生誓願
2017年9月12日 帰天

■殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

▽Sr.Mアナニア阿部咲子



56年間の修道生活を送り、急性呼吸不全のために12月4日未明、新田マリア院において、突然神様ののもとに召されました。藤女子大や旭川藤女子高の図書館で20年働き、修道院で院内の仕事をした後、北見藤

女子高の寄宿舎で17年間生徒たちの世話をしました。享年83歳

【略歴】

1934年7月20日 岩手県一関市生まれ
1950年12月25日 受洗
1961年3月24日 入会
1969年8月12日 終生誓願
2013年11月23日 誓願金祝
2017年12月4日 帰天

教区の風

カト高OB会を終えて
～主よあなたの呼ぶ声が～

1970年(昭和45年)

に、当時札幌のカトリック信者の高校生が、札幌地区の他の教会の高校生と交流する場が欲しいという強い要望により、「札幌地区カトリック高校生連合」(以下略して「カト高」)が発足しました。

「カト高」は、それぞれの時代に、様々な形態を変えながらも、キリストの名の元に全道各地から高校生

が集い、練成会や巡礼キャンプなどを中心とした活動を続け、それぞれの時代の担当司祭から指導を受けながら、現在まで脈々と受け継がれて来ました。

1978年(昭和53年)まで、北11条教会の敷地内にあったカトリックセンターを活動の拠点としていましたが、老朽化のため取り壊され、北1条の司教館の奥に新しく建てられた「ベネディクトハウス」に拠点を移し、長きにわたって使用させていただきました。そして30年以上を経て

今度はベネディクトハウスが取り壊されることとなり、今年になってから「保管されている沢山のカト高の写真アルバムを引き取ってほしい」旨の連絡がありました。後日(5月中旬)、都合のつく者たちでアルバムを整理に行きました。懐かしい思いでベネディクトハウスに入り、アルバムを確認すると100冊ほどあ

ったため、年代順に分けてまとめ、全て持ち帰りしました。後日、改めて、7人で集まり、写真とアルバム

は保管場所が見当たらないため、保存用にそれぞれの年代の集合写真等をピックアップし、デジタル化する作業をする中で、「OB会を開いて写真を持ち帰ってもらおう!」という方向に話

がまとまり、2年後に迎えるカト高50周年に向けての布石となるようにOB会を開くことになりました。

写真の整理をしていた5・7・9・12期を中心とした13名が発起人となり、代表を徳山大(12期・北11条)が務めることとなり、OB会の準備を始めました。準備期間もあまりなく大々的に宣伝ができないため、50名程程度の参加者を見込み、内容は第一に「ミサ」をすること、第二に「交流会」を開くこととし、クチコミで連絡の付く方に周知し、出席の確認をすることとしました。

日程は10月8日(日)15時より札幌北1条教会にて、勝谷太治司教(2期)司式による「感謝のフォー

クミサ」を、17時30分より「ホテルで交流会」をすることになりました。

そして、まるでカト高時代の執行部のように、発起人は準備で集まり、役割分担をして日常の生活に戻り、それぞれの役割を進めながら、気が付いたことはインターネットを利用しSNSでやり取りをしながら、確認や提案、そして改善しながら、楽しく準備を進めていきました。

そんな折、9月3日に札幌地区使徒職大会が藤女子大学であり、発起人2人で案内チラシを持ってカト高OBらしき方々を探しましたが、探していた年代の方

の層がスッポリと抜けていることに、札幌地区カトリック教会の実情を垣間見て愕然としました。また、その御ミサの勝谷司教の説教の中で、現在のカト高の実情について触れられ、今年度の「カト高夏のキャンプ」の参加希望者がなく中止となった話を伺い、ショックを受けるとともに、我々に何かできることはないかと考えさせられました。

そして、いよいよ当日を迎え、北1条教会には続々とOBが集まり、上杉神父(3期)も駆けつけて下さり、懐かしいフォークミサに総勢60名で与ることができ、心をひとつに祈りました。その後のホテルでの交流会には1期から43期までの52名が参加し、大先輩からフレッシュな若者までひとつにながることができ、とても懐かしく温か

く楽しい時間を過ごし、今後に向けてとても意義のあるものとなりました。これからは、OBとしてカト高にどんなサポートができるのか、札幌教区で果たすべき役割は何かを模索しながら、2年後の「カト高誕生50周年」を迎え、より多くのカト高OBが、主の呼びかけに応じて集い、より多くののりがあるようにと願っています。

『主の食卓を囲み 命のパンをいただき 救いの杯を飲み 主にあつて我らはひとつ』

2017年カト高OB会
副代表 木太宏人
(9期・北26条)